

思議なことに鈴虫はほとんどいなかった。嗜好が違うらしい。

渡邊さんはよく「鈴虫と文学」の話をする。奈良時代までは鳴く虫の総称はコオロギだったと。ところが、今から1千年前の平安中期になると、鈴虫という言葉が登場してくる。紫式部の『源氏物語』には、光源氏が女三宮と逢瀬を重ねるくだりに「いろんな虫が鳴いているが、ひとときわ鈴虫の音が聞こえて、優雅だ」と語る場面があるとか。源氏物語は当時の公家の生活を表現したのだから、そのころには日本人と鈴虫の関係が深くなっていったということが分かる。

しかし、現代の鈴虫は人間が保護しないと、命をつなげることが難しい生き物になってしまった。野生の鈴虫はほとんどいない。秩父の山や荒川の河川敷、長野県の一部などに生息している場所があるだけ。しかも、いくら卵を放つても孵らない。渡邊さんも今まで何千匹も実験してみたがダメだった。実は、活動の動機は鈴虫の普及というよりも、鈴虫を飼っている人のために交換できる場を提供したいということだった。生物は限られた子孫の間で交配を繰り返すと、遺伝子が弱くなってしまう。

昆虫はそれが極端で、近親交配を繰り返すと絶滅する。渡邊さんも大学の4年間に新しい鈴虫を混ぜることができなくて、絶滅させたという経験をしている。当時はインターネットなどなかったのだから、鈴虫を飼っている人を探るのが大変だったのだ。だから、飼っている人は自分と同じように鈴虫の交換に困っているはずだと思った。

就職して新潟に転勤したとき、鈴虫の頒布会があるのを知った。行ってみると、大勢の人が集まって鈴虫を分け合っていた。会費を払うと、次の年の開催案内がくる仕組み。いつか自分もこのような会をやりたいと思った。鈴虫の保存のためにはやらなければならぬことだったのだ。

「上尾スズムシの会」の設立は2010年（平成22年）。上海から帰った後の2年間ほどは自転車に乗り、鈴虫の声を聞いて回った。音色が聞こえると、その家を訪ねる。人からもらったと聞けば、その人に会った。こ

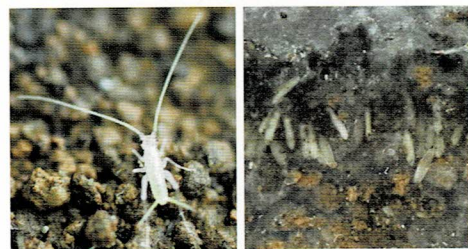
の方法でたくさん鈴虫を孵化させている人を探し出し、発起人8人を集めたのだ。

現在の会員数は134人。8月に鈴虫無料頒布会、年に2回の勉強会を開催している。市長も賛同してくれて、今では市役所など市内12か所に飼育容器を設置している。2019年の鈴虫交換会は8月4日（日）に富士見小学校で行う予定だ。

取材当日、渡邊さんはその容器の一つを持ってきてくれた。土の中の白く細長い点々に見えるものが冬眠している卵だという。容器の中でメスとオスを交配させ、メスのお腹が卵で膨れ始めると、オスは卵の栄養源としてメスに食べられる。その後、メスは産卵管を土の中に差し込み、卵を産む。メ



「上尾スズムシの会」の仲間たち



孵化したばかりの幼虫

土の中の白く細長いものが卵

スも卵を産むと、11月には死んでしまう。これが鈴虫の宿命だ。富士見小学校にも容器を置いて、この過程を知ってもらう取り組みをしている。孵化は6月ごろ。5ミリの満たない透明な幼虫が土の中からムクムクと出てくる。その瞬間をぜひ見てほしいと思う。これが命がながるといふことなのだ。

目標は1千世帯での飼育

上尾市の人口は約23万人、世帯数は約10万。その1%、1千世帯に飼ってもらうことが渡邊さんの目標だ。そうならば、秋には上尾のまち中で鈴虫の音色が聞こえるはずだ。しかし、現在はまだ330世帯。「この活動はまちづくりそのもの。しばらく頑張ります」と、仕事のとこと同じ言葉が口にした。鈴虫の飼育は難しくない。エサはレタスがベスト。孵化時の邪魔にならないように、土に直接では



渡邊さんの部屋は昆虫部屋と化している